

講師

財津 倫子

## ■ 学歴

---

1. 2023年 3月 大分県立看護科学大学大学院 博士課程修了

## ■ 学位

---

1. 2023年 博士（看護学）

## ■ 研究分野

---

1. 看護教育学
2. 成人看護学
- 3.

## ■ 研究キーワード

---

1. 看護大学生 臨地実習適応感 アタッチメントスタイル
2. 医療システム 退院調整 医療提供システム

## ■ 研究課題

---

1. 看護教育学に関して、看護大学生のアタッチメントスタイルと実習の適応感との関連について研究を進めている。看護大学生へ対し、アンケートを実施し、分析した結果をまとめ、実習適応感については論文をまとめた。続いてアタッチメントスタイルと実習適応感の関連について調査を行い、結果を論文にまとめた。今後は、実践を行い、データを整理する予定である。
2. 成人看護学（急性期）に関して、入院・治療・退院・外来・地域における医療提供システムについての研究を進める予定である。

## ■ 担当授業科目

---

1. クリティカルケア看護学（前期：看護学科） 選択
2. 成人看護学演習（前期：看護学科）必修
3. 健康教育論（前期：看護学科）必修
4. 看護研究の基礎（前期：看護学科）必修
5. 看護学（後期：栄養学科）←開講なし
6. 成人急性期看護方法論（後期：看護学科）必修
7. 成人急性期看護学実習（後期：看護学科）必修
8. 看護のための臨床検査（後期：看護学科）必修
9. 看護総合実習・演習（前期・後期：看護学科）必修

## ■ 授業を行う上で工夫した事項

---

※ 助教・助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項

1.	<p>授業科目名【クリティカルケア看護学】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 危機的状況にある患者・家族、医療従事者の倫理的課題についてのグループワーク発表では、学生同士で質疑応答ができるよう計画し、理解が深まるよう努めた。</li> <li>2. 認定看護師における演習においては、ともに技術演習を行い、学生が理解不足である箇所は補いながら、ともに実践し、学生の理解が深まるよう努めた。</li> </ol>
2.	<p>授業科目名【成人看護学看護過程演習】</p> <p>&lt;講義&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 事前学習の方法・病態関連図・フェイスシート・データベースアセスメント・フォーカスアセスメント・全体像・問題リスト・計画立案・評価・評価日評価とは何か、情報の整理の仕方、分析の仕方、計画立案方法、評価方法について解説している。</li> </ol> <p>&lt;看護過程&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 事例の読み方、考え方を説明し、次にどの教科書のどのページに参考となることが記述されているかを示し、教科書を確認しながらの分析を進める方法を定着させた。</li> <li>2. 講義後、看護過程の展開について担当グループへ再度解説し、全員が理解できるよう努めた。</li> <li>3. グループワークでの学びが深まるよう、他者との意見交換の場を設けた。</li> <li>4. 個人でのファイル作成であり、できているところも伝えながら、前進できるよう指導を行った。</li> </ol> <p>&lt;看護技術：周手術期の看護&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 術直後の観察の実際をわかりやすくデモンストレーションしながら、観察の根拠やポイントを説明した。学生が、ベッド毎に別れて、技術練習を実施する際、学生のできているところできていないところをタイムリーに伝え、時には質問も交えながら、自分で考え理解しやすいよう指導した。</li> </ol>
3.	<p>授業科目名【健康教育論】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 理論の講義から指導案・パンフレット作成、発表までの実践を行った。</li> <li>2. 事例を提示し、どのような項目でパンフレットを作成するかはあらかじめ伝え（2年生が対象であり、パンフレットの構成を考えることは、まだ難しいと考えた）、その項目内容で個別性をふまえるとどのように説明をすれば相手が理解しやすいのか、相手にわかりやすくするためにはどのような工夫が必要かを、自らで考えて気づくことが出来るような授業とした。指導案を作成し、パンフレットを作成するだけでなく、指導を受ける側（患者体験）も経験させ、客観的に自己を振り返る機会（自己評価表の配布）を設けた。</li> </ol>
4.	<p>授業科目名【看護研究の基礎】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 担当部分を4名の教員が講義を行い、それを受けた形で個人ワークやグループワークを行った。</li> <li>2. 研究テーマの選定から、Google フォームの作成、論文検索、研究計画書の作成、依頼文・承諾書・調査票の作成、研究説明文書の作成、質問紙調査、結果の集計、分析、抄録作成、発表までを行った。</li> </ol>
5.	<p>授業科目名【看護学】</p> <p>開講無し</p>
6.	<p>授業科目名【成人急性期看護方法論】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 消化器、循環器の構造と機能の説明から、その検査・治療と術前術後の看護を、パワーポイント</li> </ol>

	<p>を用いて説明する際、図や画像を用いてわかりやすく解説した。項目ごとに国家試験問題を入れ込み、一人にあてて解答させるが、全員で考えることが出来るよう工夫した。</p> <p>2. レジメの重要なポイントは赤く反転させ、学生が重要な個所を自身でチェックできるよう工夫した。</p> <p>3. 課題は、そのまま3年生の前期(看護過程)につながるものとし、学びがつながるよう工夫した。</p>
7.	<p><b>授業科目名【成人急性期看護学実習】</b></p> <p>1. コロナ禍により臨床実習が9時から12時までの3時間であった施設もあったが、全グループ臨地実習を行うことができた。</p> <p>2. 知識の上でわからなければ、どこに(教科書や参考書や事前課題)戻ればいいのかを伝え、自分で考えることが出来るよう導いた。また、質問しやすい雰囲気を作り、グループ間そして教員へもわからないことがあれば質問・確認ができるように、臨地での指導の際は、必ず学生に所在を伝えた。</p> <p>3. 直接指導に当たる教員と毎日コンタクトをとり、各学生の目標やゴールを定め、協力して指導を行った。</p> <p>4. カンファレンスにおけるコメントを伝える際は、まず良い点を伝えてから、注意を要する箇所をコメントするよう心掛けた。先に注意をすると、その後のコメントは頭に入ってこない様子が見受けられ、良い点を伝えてから、重要なポイントを伝えるよう努めた。</p> <p>5. 実習終了後の面接においては、学生自身に出来たことと出来なかったことを考えさせ(自身で気づかない学生にはこちらからコメントする場合もある)、できなかった項目について、なぜ出来なかったのかを、ともに考えるようにした。そして、今回出来なかったことを、次の実習でできるようになるためには、具体的に何をすべきかを考え、今後の行動目標および課題を明確にした。</p>
8.	<p><b>授業科目名【看護のための臨床検査】</b></p> <p>1. 担当部分を3名の教員が講義を行い、前(知識確認テスト3分)後(小テスト3分)を実施した。</p> <p>2. 章が終わるごとに、国家試験問題を出题し、学生に解答させることで、全員が自身の理解度を確認できる機会を必ず設けた。</p> <p>3. 演習では、心電図の波形が出る人形を用い、グループごとに12誘導の装着を体験した。装着のポイントを学ぶとともに、装着される患者の気持ちも考えることができる機会を設けた。</p>
9.	<p><b>授業科目名【看護総合実習・演習】</b></p> <p>1. 実習希望病棟決定後、文献研究のテーマを決め、文献研究を進め(週1回のゼミ)、文献研究の結果に即した実習計画書を作成。その後、実習病棟に実習計画書を発表し、指導を受け、必要な事前学習を進め、臨地実習に臨んだ。総合実習においては、病棟との調整は学生に任せ、報告・連絡・相談・調整を学ぶことができるよう支援した。</p> <p>2. 文献研究においては、構成・参考文献の示し方・図や表の挿入・参考文献リストの記入方法・倫理規定などについて解説し、週1ゼミを行い、完成まで指導を繰り返した。</p> <p>3. 実習終了後、文献研修についてパワーポイントで(10分)発表できる資料を作成させ、発表会を開催(質疑応答5分)。相手に分かりやすく伝える資料を作成する難しさ、相手に伝わりやすい話し方、質問の仕方、質問に対する答え方等を学ぶことのできる機会を設けることで、就職してからの研究発表につながるよう支援した。</p>

## ■ 学会における活動

	加入時期	所属学会等の名称	役職名等（任期）
1.	2004年12月～現在に至る	日本看護管理学会	
2.	2005年6月～現在に至る	日本運動器学会（日本整形外科看護研究会より改名）	査読委員(2009年4月～現在に至る)
3.	2007年3月～現在に至る	日本看護科学学会	
4.	2015年12月～現在に至る	日本看護学教育学会会員	

## ■ 研究業績等に関する事項（2023年度）

	発行又は 発表の年月	著書、学術論 文等の名称	単著・ 共著の別	発行所、発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
（著書）					
1.					
2.					
3.					
（学術論文）					
1.					
2.					
3.					
（翻訳）					
1.					
2.					
3.					
（学会発表）					
1.					
2.					
3.					

## ■ 外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）

（1）共同研究				
	研究題目	交付団体	研究者 ○代表者（）内は学外 者	交付決定額 （単位：円）
1.				
2.				
3.				

（2）個人研究				
	研究題目	交付団体	交付決定額	備考

			(単位：円)	
1.				
2.				
3.				

## ■ 社会における活動

	任 期 期 間 等	団体・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等
1.	2024年4月～2025年3月 (2009年4月～現在に至る)	日本運動器看護学会	日本運動器看護学会査読委員
2.			
3.			

## ■ 学内における活動等（役職、委員、学生支援など）

	任 期 期 間 等	会議・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等
1.	2022年4月～2024年3月	公開講座委員	
2.			
3.			